

終末期の悪の三位一体と偽預言者の正体

野獣の印を受けた者とその像に崇拝をささげる者とを惑わした偽預言者(啓示 19:20)

悪魔は火と硫黄との湖に投げ込まれた。そこは野獣と偽預言者の両方がすでにいるところ(啓示 20:10)

地から上がる
2本角の野獣

海から上がる
第1の野獣

龍

龍の口, 野獣の口, 偽預言の口
三つの汚れた靈感の表現
(啓示 16:13)

野獣

偽預言者

…それらは[王たち]を, ヘブライ語でハルマゲドンと呼ばれる場所に集めた…
(啓示 16:16)

終わりの日の悪の枢軸はこの三者であり、これらが三位一体となって未曾有の戦争、患難を引き起こす。野獣は主に政治担当、そして第二野獣（偽預言者）は宗教担任。

2本の角のある地から上がる野獣とは何物か

(啓示 13:11 - 13) …別の野獣が地から上って行くのを見た。それには子羊のような二本の角があった。それは龍のように話しはじめた。そして、第一の野獣のすべての権威をその前で行使する。また、地とそこに住む者たちに、致命的な打ち傷のいえた第一の野獣を崇拝させる。また、大いなるしるしを行なって、人類の前で火を天から地に下らせることさえする。

啓示の後の記録から、この地から上がる野獣は、「偽預言者」と呼ばれるものと同一であることが判明する。

この聖句の続きを見ると、(下の箇条書きを参照) この獣の行動は、政治的なものというより、スポークスマン(代弁者)として、人類にメッセージを送り、野獣を「崇拝」させるべく、あらゆる狡猾な方策に尽力するものである。

- 剣の一撃を受け、復活した野獣のために像を作るよう全地に提唱。
- 野獣の像に息を与える。
- 野獣の像を崇拝しない者をみな殺しにさせる。
- 人類のあらゆる階層、階級の人を強制して、右手や額に印を受けさせる。
- 野獣の名もしくはその名の数字のしるしを持たない者に売買を禁止。

これは「偽預言者」なので、『見よ、ここにキリストがいる』とか、『あそこに！』『見よ、彼は荒野にいる』『見よ、奥の間にいる』などと言うのも皆、このものです。

(マタイ 24:24) …偽キリストや偽預言者が起こり、できれば選ばれた者たちをさえ惑わそうとして、大きなしるしや不思議を行なうからです…

「選ばれた者たち」これは、聖書の知識を持つ、それまで、信仰と忠節を保ってきたクリスチャンのことですが、なぜ、そんな人たちさえ、惑わされるのか？ それは大きなしるしや不思議を行うからです。

(マタイ 24:4 - 27) …そこでイエスは答えて言われた、「だれにも惑わされないように気を付けなさい。5 多くの者がわたしの名によってやって来て、『わたしはキリストだ』と言って多くの者を惑わすからです。6 あなた方は戦争のこと、また戦争の知らせを聞きます。恐れおののかないようにしなさい。これらは必ず起きる事だからです。しかし終わりはまだなのです。7 「というのは、国民は国民に、王国は王国に敵対して立ち上がり、またそこからここへと食糧不足や地震があるからです。8 これらすべては苦しみの劇痛の始まりです。9 「その時、人々はあなた方を患難に渡し、あなた方を殺すでしょう。またあなた方は、わたしの名のゆえにあらゆる国民の憎しみの的となるでしょう。10 またその時、多くの者がつまずき、互いに裏切り、互いに憎み合うでしょう。11 そして多くの偽預言者が起こって、多くの者を惑わすでしょう。12 また不法が増すために、大半の者の愛が冷えるでしょう。13 しかし、終わりまで耐え忍んだ人が救われる者です。14 そして、王国のこの良いたよりは、あらゆる国民に対する証しのために、人の住む全地で宣べ伝えられるでしょう。それから終わりが来るのです。15 「それゆえ、荒廃をもたらす嫌悪すべきものが、預言者ダニエルを通して語られたとおり、聖なる場所に立っているのを見かけるなら、(読者は識別力を働かせなさい、) 16 その時、ユダヤにいる者は山に逃げはじめなさい。17 屋上にいる人は、家から物を取り出そうとして下りてはならず、18 野にいる人は、外衣を拾おうとして家に帰ってはなりません。19 その日、妊娠している女と赤子に乳を飲ませている者にとっては災いになります！ 20 あなた方の逃げるのが冬期または安息日にならないように祈っていなさい。21 その時、世の初めから今に至るまで起きたことがなく、いいえ、二度と起きないような大患難があるからです。22 実際、その日が短くされないとすれば、肉なる者はだれも救われないうでしょう。しかし、選ばれた者たちのゆえに、その日は短くされるのです。23 「その時、『見よ、ここにキリストがいる』とか、『あそこに！』とか言う者がいても、それを信じてはなりません。24 偽キリストや偽預言者が起こり、できれば選ばれた者たちをさえ惑わそうとして、大きなしるしや不思議を行なうからです。25 ご覧なさい、わたしはあなた方にあらかじめ警告しました。26 それゆえ、人々が、『見よ、彼は荒野にいる』と言っても、出て行ってはなりません。『見よ、奥の間にいる』[と言っても]、それを信じてはなりません。27 稲妻が東の方から出て西の方に輝き渡るように、人の子の臨在もそのようだからです。

福音書の「終わりのしるし」には興味深い特徴があることに気付きました。

全歴史上、類例のない時となる記述であり「地震」を除いて全て「人為的」なものであるにも関わらず、他の預言書と違い、誰がそれを引き起こすのかと言うことが一言も語られていないのです。

全体的に、出来事、事象として語られています。

戦争にしても、必ず誰かが引き起こすものです。誰が、クリスチャンを「患難に渡し殺す」のか、あるいは、社会情勢だとしても「裏切り、憎み合い、不法が増し、大半の愛が冷える」事態を引き起こす原因をもたらす影響力なしに、ただ何となくそうなるということはありません。

ただ、一つだけ登場するのが、「荒廃をもたらす嫌悪すべきもの」です。これにしても、直接の原因者だとは言われず、ただそれを見たら逃げ始めるように、と言われているだけです。ところが、誰がそれを行うかを明らかにし、しかも頻繁に登場するのが「偽預言者」です。

弟子たちの質問に答え始めるにあたって、開口一番に言われたのが「誰にも惑わされないように気を付けなさい」です。

「偽預言者」は物事の真つ先に登場し、率先して行動し、様々な機会に人々を惑わし、その気にさせ、世論を形作り、誤導してゆくムードメーカーとして、「終わりの日」に、「野獣」がサタンの手先として行動する時、常に協力して、サタンの口先として重要な役割を果たす者であることがわかります。

(マタイ 24:4 -) 「誰にも惑わされないように気を付けなさい。多くの者がわたしの名によってやって来て、『わたしがキリストだ』と言って多くの者を惑わすからです。あなた方は**戦争**のこと、また戦争の知らせを聞きます。恐れおののかないようにしなさい。これらは必ず起きる事だからです。しかし終わりはまだなのです。「というのは、国民は国民に、王国は王国に敵対して立ち上がり、またそこからここへと**食糧不足**や**地震**(**疫病** ルカ 21:11)があるからです。これらすべては苦しみの劇痛の始まりです。

(啓示 6:1 - 8) 子羊が七つの**封印の一つ**を開いた時にわたしが見ると、見よ、**白い馬**がいた。それに乗っている者は弓を持っていた。そして、彼に冠が与えられ、彼は征服しに、また征服を完了するために出て行った。また、彼が**第二**の封印を開いた時、別の、**火のような色**の馬が出て来た。そして、それに乗っている者には、人々がむざむざ殺し合いをするよう地から平和を取り去ることが許された。そして**大きな剣**が彼に与えられた。また、彼が**第三**の封印を開いた時、見ると、見よ、**黒い馬**がいた。それに乗っている者は**手にはかり**を持っていた。そしてわたしは、四つの生き物の真ん中から出るかのような声が、「小麦一リットルは一デナリ、大麦三リットルは一デナリ。オリーブ油とぶどう酒を損なうな」と言うのを聞いた。また、彼が**第四**の封印を開いた時、見ると、見よ、**青ざめた馬**がいた。それに乗っている者には“死”という名があった。そして、ハデスが彼のすぐあとに従っていた。…

(啓示 6:8 後半) そして、地の四分の一に対する権威が彼らに与えられた。**長い剣**と**食糧不足**と**死の災厄**をもって、また**地の野獣**によってそれを殺すためである。

さて、もう一度マタイ 24 章の記述ですが、今度は、これから「終わりの日」の主要な要素とその順番に注目してみたいと思います。

ここから、その要素は「4つ」すなわち、「偽キリスト」つまり「偽預言者」「戦争」「食料不足」「地震、疫病」の順にキリストは語られました。

さて、次は啓示 6 章の記述ですが、今度も、これから「終わりの日」の主要な要素とその順番に注目してみたいと思います。

ここから、その要素は「4つ」すなわち、「白い馬」(?)、「赤い馬」(戦争)、「黒い馬」(食料不足)、「青ざめた馬」(地震、疫病)の順に「子羊」(キリスト)は封印を解かれました。



さて、次は啓示 6 章 8 節の後半のまとめの部分の記述ですが、今度も、これから「終わりの日」の主要な要素とその順番に注目してみたいと思います。

ここから、その要素は「4つ」すなわち、「長い剣」(赤い馬、戦争)、「食料不足」(黒い馬)、「死の災厄」(青ざめた馬、地震、疫病)では、4 つめに挙げられている「地の野獣」とは何でしょうか。

どうして、突然ここに野獣が出て来るのでしょうか。6:1 から 8 節までの 4 頭の馬とその乗り手と、その災いの特徴を述べて来て、8 節で、全体をまとめて締めくくっているこの節の「長い剣」と「食糧不足」「死の災厄」がその前の節の赤、黒、青ざめた馬を指していることは誰でも分かります。従って 4 つのうちの後一つも、もう一つを指しているのは道理に合っています。そして、この「地の野獣」についての「新世界訳」の参照聖句を見ると、この表現の歴史背景をよく知ることができますので、それを参照して見ましょう。

左上の「地の野獣 (ウ)」という部分の参照は、レビ記 26:22、エゼキエル 14:21、33:27 が挙げられています。

つるぎの 長い剣と食糧不足と死の災厄
また地の野獣によって
めである。

時、	ノマ 7:14 イエレ 15:2	としはと
なさ	エゼ 5:17 ルカ 21:11	12 ま
見る	ウレビ 26:22 エゼ 14:21	に見ると
の	エゼ 33:27	たいよう
乗っ	エマタ 24:14 ヨハ 18:37	て、太陽
いた。	啓 20:4	月は全
りま	オマタ 24:9	して、し
の真	ヨハ 3:12	うご
-	カレビ 17:11 啓 17:6	

この参照聖句を読んでいくと、この表現は、啓示の書で初めて用いられているのではなく、実はこの4つ1セットのエホバの裁きは古くからたびたび用いられていて、ちょっと、表現がひんしゆくを買うかも知れませんが、分かりやすく表現すると、神の裁き「詰め合わせ1バック」のようなものです。先ず、ここではエゼキエル14：21を引用して見ましょう。

害をもたらすわたしの四つの裁きの行ない一剣と、飢きんと、害をもたらす野獣と、疫病一がある（エゼキエル14：21）

もっとも古い記述としては西暦前1470年頃記されたレビ記26：1－31に見ることができます。

（レビ記26:14）…もしあなた方がわたしに聴き従わず、これらのすべてのおきてを行なわないなら、処罰として結核と燃える熱病をもって…

だが、これらの事にもかかわらずあなた方がわたしに聴き従わないなら、野の野獣をあなた方の中に送り…

これでダメなら、これ。それでもダメならこれ。と言う具合にこうした記述が繰り返されています。

当然、この4つは、同じ目的を果たす仲間、同類です。例えば剣を免れた者は飢饉で死ぬ。飢饉や疫病を免れた者は地の野獣で殺される。と言う具合に、言わば4人組の殺人部隊の仲間であり、それぞれ補い、協力し合って、完全な滅びをもたらすというその目的を果たしました。そして参照を追ってもう一つ見つけました、これは4つのうち1つはアレンジバージョンです。

（エレミヤ15:2-3）…『エホバはこのように言われた。「だれでも死の災厄に渡される者は、死の災厄へ！また、だれでも剣に渡される者は、剣へ！また、だれでも飢きんに渡される者は、飢きんへ！また、だれでも捕囚（とりこ）に渡される者は、捕囚（とりこ）へ！」』

ここでは、地の野獣の代わりに「捕囚」（とりこ）と表現されています。前の3つは「死」を意味するのに対して、とりこは捕えられてしまうことというニュアンスがあると思います。啓示6章の、「白い馬」の乗り手は「弓を持っていて」狩猟に向かうハンターとして描かれていますし、その目的も「征服」するとなっているので、必ずしも、後の3つのように「死」を意味しないのかも知れません。

では、これまで、考慮してきた聖書中の表現から、「白い馬」の乗り手の実体は何であると捉えるのが聖書的根拠に適っていると言えるでしょうか。

福音書でイエスが、戦争に先立って真っ先に登場する者として挙げたのが「わたしがキリストだ」と言っている「偽キリスト」でした。

そして、その前に「惑わされないよう気をつけなさい。と警告しています。

誰の偽物ですか。「キリスト」の偽物です。一見キリストのように見えなければ、誰が惑わされるでしょうか。多くのひとには「間違いなく確かにキリスト以外の何物でもない」と思わせる要素を待ち合わせているはずです。

それら惑わされる人はこう考えるかも知れません。「だって、冠をかぶっているじゃないか。そしてなにしろ「白い馬」に乗っている。「白」は聖書の中で清さの象徴として描かれている！」



では、「冠」や「白」も、王の立場や、清さを必ず表しているというものでは[ない]と言える聖書的根拠を挙げておきましょう。

まず「彼に冠が与えられ」という表現ですが、冠はその者の高い立場を表す言葉として、聖書中に時々用いられています。その場合必ず、「・・・の上には冠があった」というように、常に初めからかぶった姿で表現されます。

しかし、この白い馬の乗り手は、登場してきた後、「そして（ギリシャ語本文[カイ]）、冠が与えられ、そして彼は出ていった」となっており、征服をしに出かける際に「与えられる」ことになっています。

つまり、言い換えれば登場してくる時点ではまだ、その立場にはいないということを示唆しています。

さて次にこの「冠」そのものについてですが、この「冠」は王権のようなものを表すのでしょうか。

この部分では「王冠」とは訳されていないことに注目して下さい。

そうです、元々のギリシャ語本文では王冠とは全く違う単語が使われています。

ここで使われているのは [στέφανος]ステファノス であり、この語は、いずれも王権とは関係のないものに使われています。例えば幾つかの例を挙げますと、

■第五のラッパで出て来る「いなご」

(啓示 9:7) …いなごの姿は戦闘の備えをした馬に似ていた。 頭の上には金のような冠 [στέφανος]と思えるものがあり…

■天の幻に見える 24 人の長老

(啓示 4:4) …二十四人の長老が、白い外衣をまとい、頭に黄金の冠 [στέφανος] を頂いて座っているのが見えた。

■フィラデルフィアにある会衆のクリスチャンたち

(啓示 3:11) …自分が持っているものをしっかりと守りつづけ、あなたの冠 [στέφανος] をだれにも取られないようにしなさい。

■男子を産む象徴的な女

(啓示 12:1) …太陽で身を装った女で、月がその足の下にあり、頭には十二の星の冠 [στέφανος]があつて…

一方、王権、もしくは支配権を表す冠は、日本語でも「王冠」と訳されており、そこで用いられているギリシャ語は [διαδήματα] ディーアデイマであり、この語は聖書全巻の中でたった三カ所にしか出てきません。その3カ所は次の通りです。

■悪魔サタン

(啓示 12:3) …火のような色の大きな龍であつて、七つの頭と十本の角があり、その頭には七つの王冠 [διαδήματα] があつた…

■海から上がる野獣（最後の帝国）

(啓示 13:1) 一匹の野獣が海から上つて行くのを見た。十本の角と七つの頭があり、その角の上には十の王冠 [διαδήματα] があつた

■イエス・キリスト

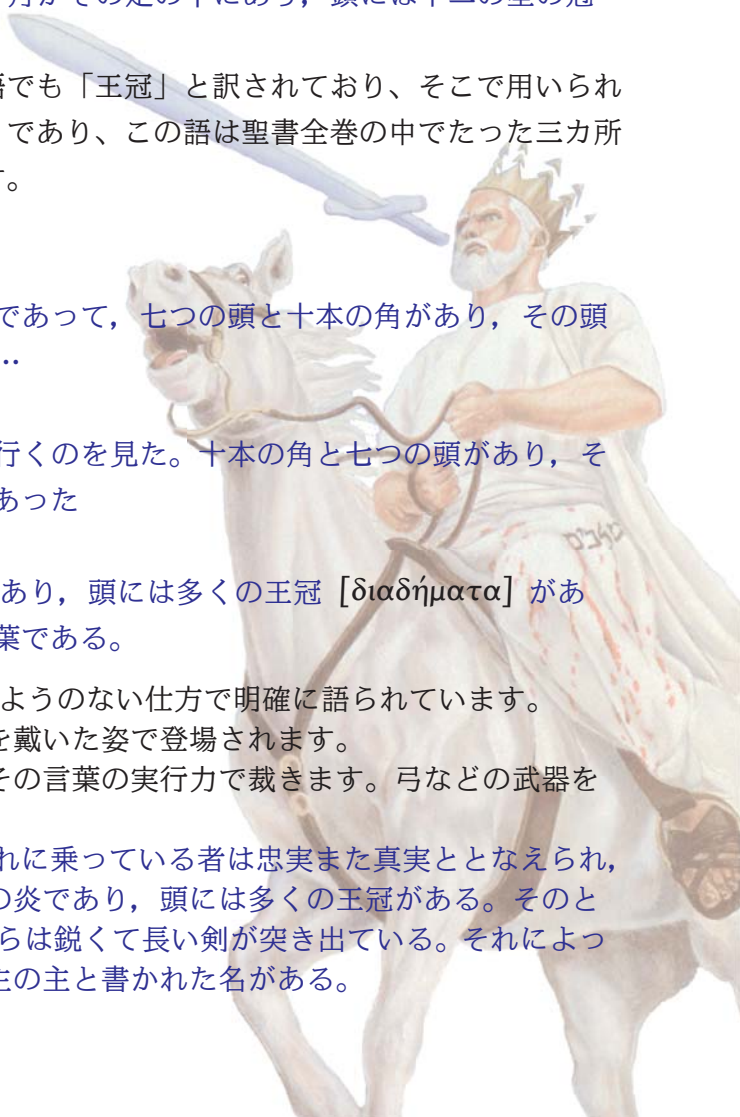
(啓示 19:12 - 13) …彼の目は火の炎であり、頭には多くの王冠 [διαδήματα] がある。・・・そのとなえられる名は神の言葉である。

こちらは正真正銘のイエス・キリストです。間違えようのない仕方で明確に語られています。

王冠は「与えられた」のではなく、初めから王冠を戴いた姿で登場されます。

そして、その名はロゴス「神の言葉」ですから、その言葉の実行力で裁きます。弓などの武器を持つ必要などありません。

(啓示 19:11 - 16) …白い馬がいた。そして、それに乗っている者は忠実また真実ととなえられ、その者は義をもって裁き、また戦う。彼の目は火の炎であり、頭には多くの王冠がある。そのとなえられる名は神の言葉である。そして、彼の口からは鋭くて長い剣が突き出ている。それによって諸国民を討つためである。そして、王の王また主の主と書かれた名がある。



さて次に「白」についてですが、白は基本的に聖書の中で「清さ」あるいは「義」の象徴として用いられています。しかし、常にそうだと言うわけではありません。その正反対のものにも用いられています。というより、外見の白さは、「欺き」、「偽善」の象徴として用いられています。

(マタイ 23:27 - 28) …「偽善者なる書士とパリサイ人たち、あなた方は災いです！ あなた方は白く塗った墓に似ているからです。それは、外面はなるほど美しく見えますが、内側は死人の骨とあらゆる汚れに満ちているのです。そのように、あなた方もまた、確かに外面では義にかなった者と人に映りますが、内側は偽善と不法でいっぱいです。

「外面はなるほど美しく見えますが」と述べられていますが、どうして美しく見えるのでしょうか。「墓」だからではなく「白い」からでしょう。

(使徒 23:1 - 3) …そこでパウロは彼（サンヘドリンの大祭司アナニア）に言った、「神があなたを打たれるでしょう、白く塗った壁よ…

本来、義なる裁きをすべきものが、律法を踏み越えて、自分に悪事を働いたことに対するパウロの抗議のことばです。

いずれも単に「白い」から、外見が「白く、清い」ように「見える」からといって「必ず」「常に」それは内側も、行動も義に適っていると闇雲に信じるべきではなく、見極めることが肝要であることを教えています。

いずれにしても、「偽キリスト」であれば、できる限りキリストに見えるように策を練るはずで、白い馬や、冠ぐらないと、他にキリストに見せる手だては何もないということになります。

冒頭で示したように、「わたしは別の野獣が地から上って行くのを見た。それには子羊のような二本の角があった。」(啓示 13:11) と述べられていたのは「偽預言者」でした。

この聖句に用いられている「野獣が地から・・・」という部分と、啓示 6:8 の「地の野獣」と言う部分のギリシャ語を比較すると同じ単語が使われていることが分かります。

θηρίον ἀναβαῖνον ἐκ τῆς γῆς 野獣が地から

θηρίων τῆς γῆς. 地の野獣

それで、誰にも惑わされないように気をつける必要があります。

偽キリストの、「わたしがキリストだ」という言葉に「多くの者が惑わされる」と警告されているからです。さらに、それをあおって宣伝する多くの人々が『見よ、ここにキリストがいる』とか、『あそこに！』『見よ、彼は荒野にいる』『見よ、奥の間にいる』などと言って、『選ばれた者たち』をさえ惑わすとも警告されているのです。